

保育園新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

六条上青木遺跡

2016年9月

社会福祉法人 相愛福社会
高松市教育委員会

例 言

- 1 本書は、保育園新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、高松市六条町地内に所在する六条上青木遺跡の調査報告を収録した。
- 2 調査地及び調査期間、調査面積は下記のとおりである。
調査地：香川県高松市六条町字上青木 595 番 1、596 番 1、597 番 1、598 番
調査期間：平成 28 年 1 月 18 日～1 月 20 日（試掘調査）
平成 28 年 5 月 12 日～5 月 20 日（発掘調査）
調査面積：約 585m²
- 3 発掘調査及び整理作業については、高松市教育委員会が実施し、補助執行により、高松市創造都市推進局文化財課文化財専門員 舟築 紀子、香川 将慶、梶原 慎司、同非常勤嘱託職員 磯崎 福子が担当した。
- 4 発掘調査から報告書作成にかかる費用については、事業者が全額を負担した。
- 5 本報告書の執筆及び編集は、舟築と磯崎が行った。
- 6 本報告書掲載の遺物写真撮影は、西大寺フォトに委託した。
- 7 本書の挿図として、国土地理院発行 2 万 5 千分の 1 地形図「高松北部」「高松南部」及び高松市都市計画図 2 千 5 百分の 1 を一部改変して使用した。
- 8 本報告書の標高値は東京湾平均海面 (T.P.) を表し、座標は国土座標第 IV 系（世界測地系）に拠った。また方位は座標北を表す。
- 9 検出遺構の縮尺は、1/40・1/80 を基本とし、出土遺物の実測図は、土器は 1/4、石器は 1/2 を原則とした。
- 10 本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SD：溝 SK：土坑 SP：柱穴 SX：性格不明遺構
- 11 土壌及び土器観察の色調表現は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）による。
- 12 発掘調査で得られた資料は、高松市教育委員会で保管している。

目 次

第 1 章	調査の経緯と経過	2
第 2 章	地理的環境・歴史的環境	3
第 3 章	調査成果	6
第 4 章	まとめ	18

挿 図

第 1 図	調査位置図 (S=1/5000)	2
第 2 図	周辺遺跡分布図	5
第 3 図	六条上青木遺跡遺構配置図	7
第 4 図	SX90 平面図	8
第 5 図	SX25 平・断面図	9
第 6 図	SD24 平・断面図	10
第 7 図	SD108 平・断面図	10
第 8 図	SD1・SK2・SD3・SP4・5・SD6・10・100 平・断面図 11	12
第 9 図	SD40・41・109・104 平・断面図	12
第 10 図	SK7・9・11 平・断面図	13
第 11 図	SK21・22・23・35・42・43・102 平・断面図	14
第 12 図	SK103・107 平・断面図	15
第 13 図	ピット列群平・断面図 (1)	16
第 14 図	ピット列群平・断面図 (2)	17
第 15 図	出土遺物	18
第 1 表	土器観察表	18
第 2 表	石器観察表	18

写真図版

第 1 調査区全景 (南から)	19
第 3 調査区全景 (北西から)	19
第 3 調査区全景 (南東から)	19
第 2 調査区全景 (南から)	19
第 4 調査区東側 (西から)	19
第 5 調査区 (北から)	19
第 6 調査区 (北から)	20
第 7 調査区 (北東から)	20
SX90 (北から)	20
SK11 (西から)	20
出土遺物	20

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯と経過

平成27年1月6日に高松市六条町字上青木595番1ほかに、保育園新築工事が計画され、社会福祉法人相愛福祉会（以下、事業者）から高松市教育委員会（以下、市教委）に埋蔵文化財包蔵地の有無の照会があった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「六条下所遺跡」の隣接地にあたることから、試掘調査実施の協議を行い、事業者の協力を得て、試掘調査を平成28年1月18日～20日の実働3日で実施することとなった。

試掘調査の結果、当該地に遺構及び遺物が確認できため、埋蔵文化財包蔵地「六条上青木遺跡」として新規で登録された。そのため、事業者から平成28年4月4日付けで提出された文化財保護法第93条第1項に基づく発掘届出に対し、香川県教育委員会より発掘調査を行う旨の行政指導があったことから、4月15日に事業者と市教委との協議の上、発掘調査を実施することとなった。

第2節 発掘調査の経過（調査日誌抄）

発掘調査は、遺構面まで掘削が到達する建物の建設箇所、防火水槽、擁壁部分について実施した。平成28年5月12日に調査区を設定し、5月20日に調査道具の撤収を終え、現地調査をすべて完了した。調査期間は実働で9日である。

調査は5月9日に開始予定であったが、雨天により延期したため連日の調査となった。

調査日誌抄（平成28年5月12日～5月20日）

5月12日（木）調査区設定。重機搬入。

5月13日（金）重機掘削開始。遺構検出開始。
擾乱・遺構掘削。

5月14日（土）重機掘削・擾乱掘削・遺構検出。

第1調査区 平・断面図作成。

第2調査区 遺構検出・掘削。

第1調査区 全景撮影。

5月15日（日）第2調査区 平・断面図作成。

第2調査区 全景撮影。

第3調査区 遺構検出・掘削。

重機掘削終了。

5月16日（月）遺構配置図（S=1/100）作成。



第1図 調査位置図 (S=1/5000)

第3調査区 平面図作成。重機回送。

5月17日（火）排水ポンプ設置。

第4・6・7調査区 遺構検出・掘削。

平・断面図作成。

第6・7調査区 全景撮影。

5月18日（水）第5調査区 遺構検出・掘削。

第5調査区 平・断面図作成。

第3調査区 遺構検出・掘削。

第3調査区 平・断面図作成。

第4・5調査区 全景撮影。

5月19日（木）第3調査区 遺構検出・掘削。

第3調査区 平・断面図作成。

第3調査区 全景撮影。

5月20日（金）第3調査区 下層遺構掘削。

第3調査区 平面図作成。

第3調査区 下層遺構完掘状況

撮影。調査終了。

第2章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松平野は、北を瀬戸内海、東を立石山山系、南を讃岐山脈、西を五色台山塊に限られた総面積約190haの平野である。標高600～1000mの讃岐山脈から瀬戸内海に向かって段階状に標高は低くなり、平野部にいくつかの山塊群が存在する。顕家花崗岩の基盤に三豊層群、沖積層が堆積して形成された中位段丘と、沖積低地及び扇状地性の低位段丘から構成され、栗林公園から久米池を結ぶ標高10m前後を境に地形の傾斜が大きく変化しており、この境界線以北が沖積作用による三角州帯と考えられている。

沖積平野の形成は塩江町に源を発する香東川による影響が最も大きい。春日川、新川といった小河川では扇状地の発達はあまり見られない。小河川には小規模な自然堤防による微高地が点在している。沖積平野の形成以前には、比較的起伏に富んだ地形を呈していたが、河川の沖積作用で埋没・平準化、人間の開墾・開削により平坦化が進んだと見られる。

現在の香東川は寛永年間に治水事業によって改修されたもので、本来の流路は2つに分流しており、その1つは石清尾山塊の東を迂回して広く氾濫していたことが知られている。この旧流路は、現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没しているが、空中写真等から、林から木太地区にかけての分ヶ池、下池、長池、大池、旧ガラ池を結ぶ流路等が知られる。その周囲には旧中洲や後背湿地が展開していたことが、過去の発掘調査でも確認されている。

六条上青木遺跡は、高松平野のほぼ中央に位置し、東側は春日川の支流である古川と、西側は香東川の旧河道に挟まれた比較的大きな微高地の東端に位置する。南に標高120mの由良山、東に古川が流れ、標高は13mで、地形は北東方向にゆるやかに傾斜する。

第2節 歴史的環境

今回の調査地は旧高松空港用地の周辺に位置し、昭和19年に陸軍林飛行場用地として強制収用された範囲の東端に隣接する。

高松平野では、過去30年における大規模な開発事業（木太第2土地区画整理事業、高松東道路建設事業、空港跡地開発事業等）に伴う事前調査により、遺跡数

が飛躍的に増大しつつある。さらに空港跡地周辺地域の開発が促進されており、調査成果が蓄積されつつある。

＜旧石器・繩文時代＞

旧石器時代の遺跡は、周辺では三谷町に所在する横内東遺跡でナイフ形石器が出土し、雨山南遺跡で多量の剣片と共に瀬戸内技法の国府型ナイフ形石器が出土している。

繩文時代では、木太町に位置する大池で繩文時代草創期の有舌尖頭器が表採されているが、晚期に至るまで高松平野部での人間活動の痕跡はあまり認められない。晚期になると、林町に所在する林・坊城遺跡（1993）の自然河道から土器や石器、木製農耕具等が出土しており、林・坊城遺跡（2004）では刻目突蒂文期の柱穴群が、はじめて居住痕跡として確認できた。

＜弥生時代＞

繩文時代晚期から弥生時代前期にかけて高松平野の各地で人間活動の痕跡を確認できるようになる。木太町から林町にわたる弘福寺領山田郡田岡比定地北地区や林町の浴・長池遺跡I・IIにおいて水田跡が確認されている。明確な居住に関わる遺構は少ないものの、農耕の定着に加え、平野部での集団活動の痕跡が確認できるようになった。

中期になると平野部の遺跡は浴・長池遺跡や多肥松林遺跡等に限られ、丘陵地帯に多く遺跡が分布する。

後期では空港跡地遺跡に大規模な集落が形成された。多肥上町の多肥松林遺跡や太田下町の太田下・須川遺跡等で集落を形成したと思われる遺構と遺物が多数確認できる。また高松平野部各所に、土器胎土中に角閃石を多く含む下川津B類土器が多く出土するようになる。

後期後半から終末／古墳時代前期にかけて、平野部にさらに多くの集落が営まれた状況が確認されている。上天神町の上天神遺跡や松縄町の天満・宮西遺跡のように外来系土器がまとまって出土した集落もある。

＜古墳時代＞

前期前半までは弥生時代終末期から継続する集落が展開する。丘陵・山塊地域に多くの古墳が築造されているが、造営母体となった集落については、中間町に所在する中間西井坪遺跡（1996）で埴輪と土製棺の製作関連遺構が確認されている。

空港跡地遺跡周辺では、古墳時代中期から後期の居住域の存在が確認されている。

<古代>

古代における高松平野は大きく山田郡と香川郡で構成されており、一部阿野郡も含まれている。平野のやや南側を東西方向に横断する南海道が設置され、南北軸が東に約9～11度振れた条里地割が広く旅行された可能性が指摘されている。松縄町の松縄下所遺跡(2001)で条里制施行に関連する可能性のある7～8世紀頃の幹線道路状遺構が検出され、太田下・須川遺跡(1995)では自然河川から平安時代の土器と共に豪華・人形・櫛が出土している。また空港跡地遺跡の南側には拝師庵寺があった。

<弘福寺領讃岐国山田郡田図>

現在の奈良県明日香村にあった弘福寺が讃岐国山田郡に領有した寺領内の土地利用の様子を詳細に描写した絵図があり、描写的時期は平安時代後半と推定される。現存する最古の年紀、天平7年(735)を有する莊園絵図であり、当時の集落・耕地の様子が分かるだけでなく、寺領の形態を示す資料として平成3年3月に重要文化財に指定されている。

昭和63年度以降高松平野部での発掘調査が本格化し、それに伴い山田郡田図の位置比定作業が進められ、高松市木太町大池南半から南側の一帯と、旧高松空港の西部から北側の一帯に存在した可能性が高いことが推測された。

弘福寺(ぐくじ)は別名川原寺(かわらでら)とも呼ばれ、7世紀末、飛鳥の地に建立された。讃岐国ほか多くの寺領を持つなど繁榮したが、9世紀以降衰微し、11世紀には東寺(とうじ)の末寺となつた。東寺長者による弘福寺所領の復興が試みられた際に、天平7年の原図をもとに本資料が製作されたと考えられている。

<中世・近世>

平安時代末(11世紀後半)、高松平野では遺跡数が増加し、鎌倉時代以降(13世紀)には多数の集落遺跡が確認されている。の中には、空港跡地遺跡、東山崎町の東山崎・水田遺跡、春日町の川南・西遺跡、香西南町の西打遺跡のように区画施設を有する建物群が展開するものもある。

中世における当地域の武士は香西氏、十河氏、由佐氏、神内氏が知られると共にこれら在地武士の居館跡や詰め城等をはじめとした遺跡や遺構等が多く確認

されている。

近世では、天正16年に生駒親正によって高松城が築かれ、のちに松平氏治下による各地の開墾・開発が進んだ。空港跡地遺跡でも近世の遺構が確認されている。

<高松空港>

調査地が隣接する香川インテリジェントパークは旧高松空港(林航行場)跡地である。

戦況の悪化に伴い、住民は突然立退きとなり、飛行場が建設された。大規模な地形改変となり、戦後農地返還されたが元の条里と大きく異なる区割りとして残ることとなった。昭和23年に三郎池より導水工事が行われ、東を流れる古川が氾濫するため改修工事を昭和27年に行った。平成元年12月香南町に新空港が建設されて空港が供用廃止になり、高松空港跡地は香川インテリジェントパークとして再開発された。

【参考文献】

高松市役所内林村史編集委員会 1958『林村史』

高松市教育委員会 1992『讃岐国弘福寺領の調査 弘福寺領讃岐国山

田郡田図調査報告書』

高松市教育委員会 1999『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ 第2次弘福寺領

讃岐国山田郡田図調査報告書』

香川県教育委員会 香川県埋蔵文化財センター 香川県土地開発公社

1996『空港跡地遺跡Ⅰ』

香川県教育委員会 財團法人香川県埋蔵文化財調査センター 香川県土

地開発公社 2002『空港跡地遺跡Ⅴ』

香川県埋蔵文化財研究会 1993『林・坊城遺跡』

香川県教育委員会 国土交通省四国地方整備局 日本道路公団

『中森遺跡 林・坊城遺跡Ⅱ 東山崎・水田遺跡Ⅱ』

香川県教育委員会 財團法人香川県埋蔵文化財調査センター 日本道路

公団 1996『中森西井坪遺跡Ⅰ』

香川県教育委員会 財團法人香川県埋蔵文化財調査センター 建設者

四国地方建設局 1995『太田下・須川遺跡』

高松市教育委員会 1987『高松市太田地区周辺遺跡詳細分布調査報告』

川畠 廉 2001『松縄下所遺跡』高松市教育委員会

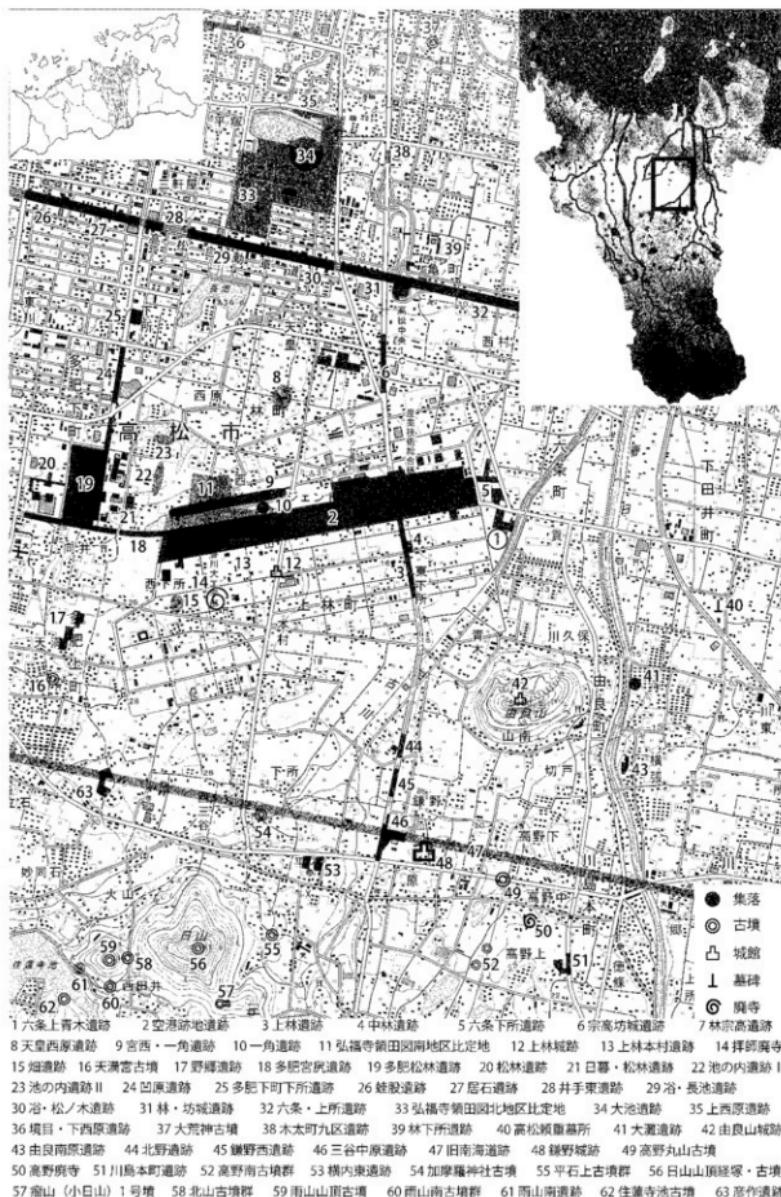
渡邊 誠 2011『空港跡地遺跡』高松市教育委員会

山本英之 1995『空港跡地遺跡(亀の町地区Ⅰ)』高松市教育委員会

山本英之 1995『空港跡地遺跡(亀の町地区Ⅱ)』高松市教育委員会

船橋 紀子・磯崎 福子 2016『空港跡地遺跡(亀の町地区Ⅰ)第2次

調査』高松市教育委員会



第2図 周辺遺跡分布図

第3章 調査成果

第1節 調査の方法

a. 調査区の設定と遺構番号、遺物の取上げ

調査区は重機掘削を行なった順に、第1調査区から第7調査区とした。遺構には、遺構の種類に関係なく検出した順番で1から番号を与えた。遺構の種類は、現地での調査所見をもとに性格を判断し、遺構番号の上に遺構の略号を冠した。

遺物の取上げは、遺構単位で、かつ出土土層が明らかな場合は、層位も記載して取上げた。

b. 記録作成

図化作業の際に使用する基準点と水準点は、世界測地系第IV系・4級基準点を用いた。平面図・断面図とともに手測りで記録を作成した。

第2節 基本層序

調査区の基本層序は、現代耕作土と床土があり、灰白色細砂～シルトの包含層の下に、現地表面下約0.5mで明黄褐色中粒砂まじりシルト～粘土の地山面となる。

第3節 遺構と遺物

古墳時代以前

SX90(第4・15図)

自然の落ち込みと考えられる。第3調査区の中央から北西に延びる。SD40とピット列群に切られる。

最大幅は約23m、深さは約0.2～0.4mで、南側ほど深くなる。

遺物は石鏡(S1)が出土している。

SX25(第5・15図)

第3調査区の南西隅から第5調査区を横切る性格不明遺構である。

埋土は2層に分層でき、上層が黄灰色中粒砂～細砂まじりシルト、下層が黄灰色～灰黄褐色シルトに地山ブロックを斑状に含む。

遺物は石鏡(S2)が出土している。

古墳時代

SD24(第6図)

第5調査区外から第3調査区の南側を東西に蛇行し調査区外へと延びる。SK23に切られる。主軸方位はN-60°-Wである。

幅約1.0～0.6m、深さ約0.15～0.1mを測る。

断面形は逆台形～浅い皿状である。埋土は単層で、中疊を含む黒褐色中粒砂まじりシルトである。

遺物は土器片が出土した。

中世以降

SD108(第7・15図)

第7調査区の中央を南北に直行し擾乱に切られる。主軸方位はN-10°-Eである。

幅約0.4m以上、深さ約0.05mを測る。断面形は浅い皿状である。埋土は単層で、灰黄褐色極細砂～シルトである。

遺物は瓦質土器茶釜(1・2)が出土している。1は口縁部から体部上半部まで残存しており、粘土帯を積み上げて成型し、口縁部はほぼ直上に伸ばしハケ目を施している。2は鋤部のみで1と接合しないが同一個体と思われる。鋤下面に被熱痕がある。出土遺物の年代から、中世と考えられる。隣接するSP106からも瓦質土器片が出土しており、同時期の可能性がある。時代不明

SD1(第8図)

第1調査区の中央を東西に直行し調査区外へと延びる溝状の遺構である。主軸方位はN-80°-Wである。

幅約1.0m、深さ約0.15mを測る。断面形は不整形である。埋土は単層で、黄灰色シルトである。

遺物は出土していない。

SK2(第8図)

第1調査区の南寄りを斜めに直行し調査区外へと延びる土坑である。主軸方位はN-25°-Wである。

幅約0.9m、深さ約0.2mを測る。断面形は不整形である。埋土は3層に分層でき、1層が灰色シルトでやや粘性がある。2層が灰オリーブ色シルトでやや粘質、3層が明黄褐色シルトで粘性がある。

遺物は出土していない。

SD3(第8図)

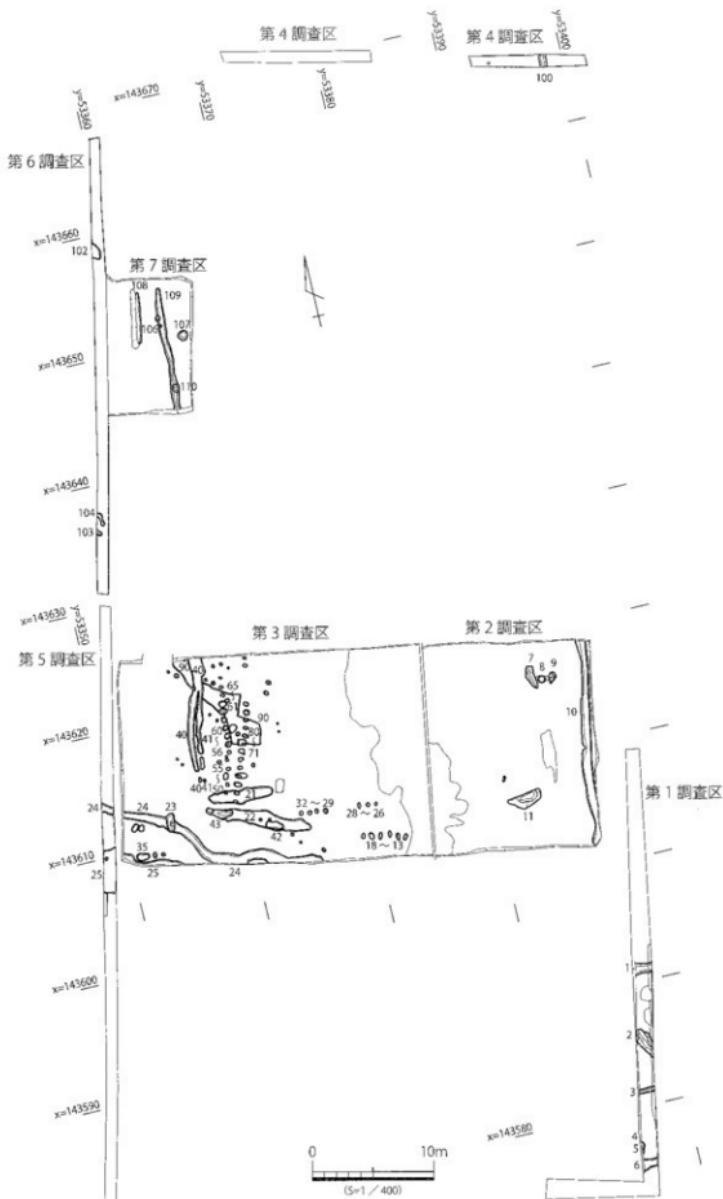
第1調査区の南側を東西に直行し調査区外へと延びる溝状の遺構である。主軸方位はN-90°-Wである。

幅約0.4m、深さ約0.1mを測る。断面形は椀状である。埋土は単層で、褐灰色シルトである。

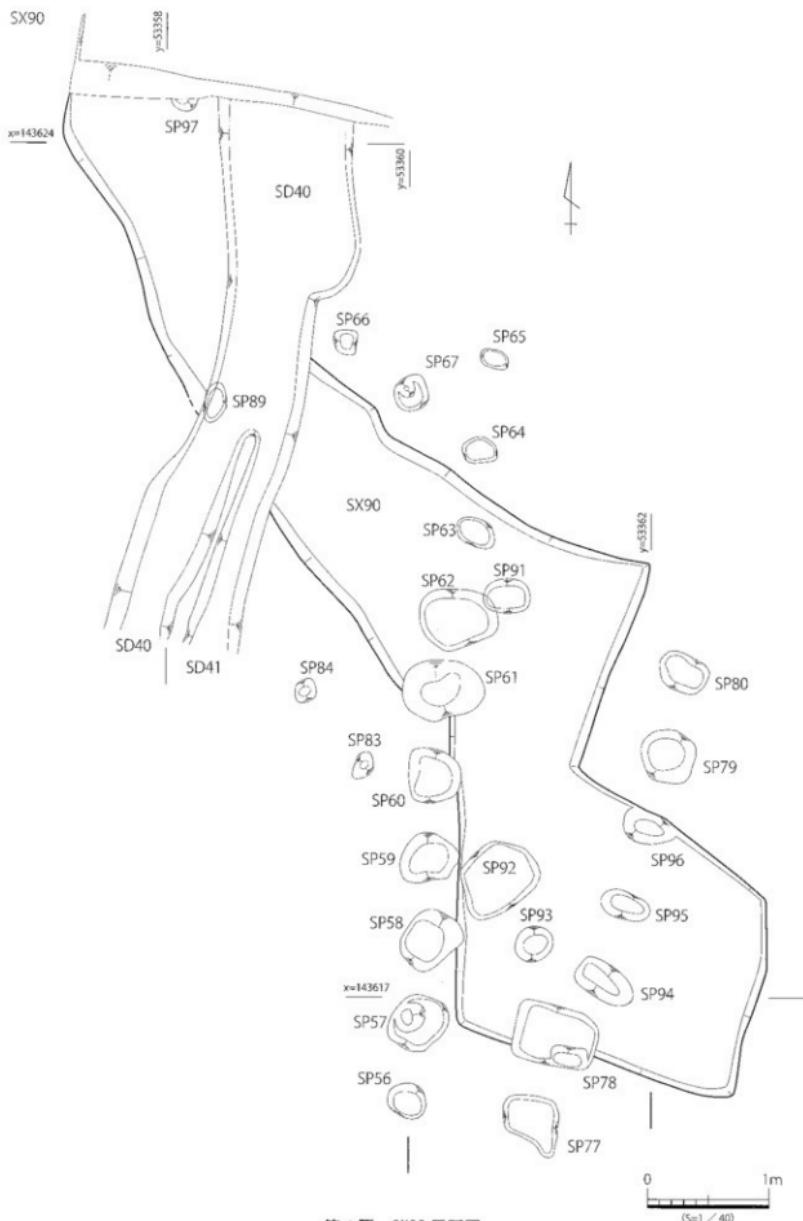
遺物は出土していない。

SP4・5・SD6(第8図)

第1調査区の南側を東西に直行し調査区外へと延びる溝状の遺構とピット状の遺構である。SD6の主軸方位はN-90°-Wである。



第3図 六条上青木遺跡遺構配置図



第4図 SX90 平面図



幅約 1.2 m、深さ約 0.1 mを測る。断面形は不整形である。SP4 の埋土は地山ブロック土を含む灰白色シルトである。SP5 と SD6 の埋土は灰白色シルトである。埋土の状況からこの 3 遺構は同時期並存の可能性がある。

遺物は出土していない。

SD10 (第8図)

第2調査区の東側を南北に直行し調査区外へと延びる。主軸方位は N-10°-E である。SD100 へと続く可能性がある。

幅約 0.8 ~ 0.5 m、深さ約 0.15 mを測る。断面形は不整形である。埋土は 2 層に分層でき、上層がにぶい黄橙色シルト、下層が褐灰色シルトで粘性がある。

遺物は出土していない。

SD100 (第8図)

第4調査区の東側を南北に直行し調査区外へと延びる。主軸方位は N-10°-E である。SD10 から続く可能性がある。

幅約 0.55 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形は浅い皿状である。SD10 との標高差は 0.2m 低い。埋土は単層で、灰黄褐色シルトである。

遺物は出土していない。

SD10、100 は現状の条里方向と一致しており、条里に伴う溝の可能性がある。

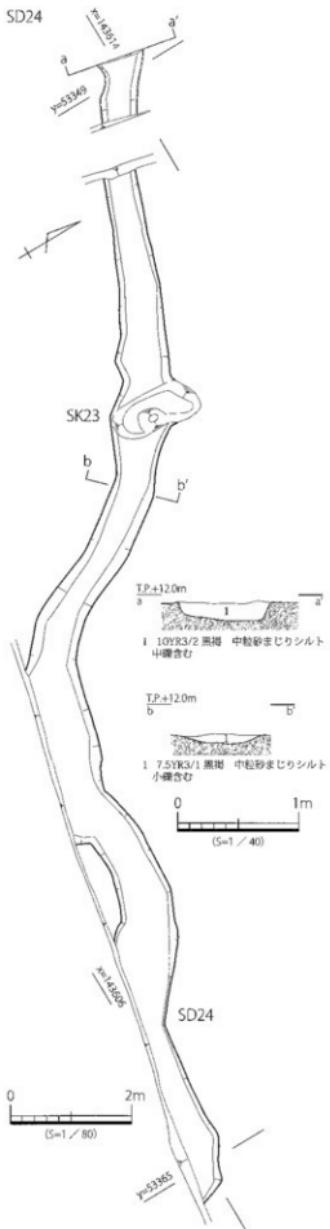
SD40・41 (第9図)

第3調査区の西側を南北にやや蛇行し合流して

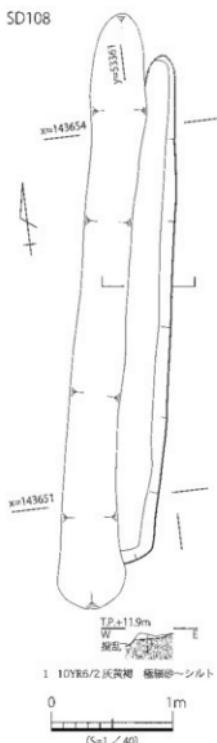
第5図 SX25 平・断面図

調査区外へと延びる。主軸方位は N-10°-E である。SD100 へと続く可能性がある。

幅約 0.5 m、深さ約 0.04 ~ 0.02 mを測る。断面形は浅い皿状である。SD40 の埋土は単層で、黒褐色粗砂まじりシルトに小礫含む。SD41 の埋土は単層で、褐灰色粗砂まじりシルトである。



第6図 SD24平・断面図



第7図 SD108 平・断面図

遺物は出土していない。

SD109 (第9図)

第7調査区の東側を南北に直行し調査区外へと延びる。SP105・106に切られる。主軸方位はN-0°-Wである。SD40から續く可能性がある。

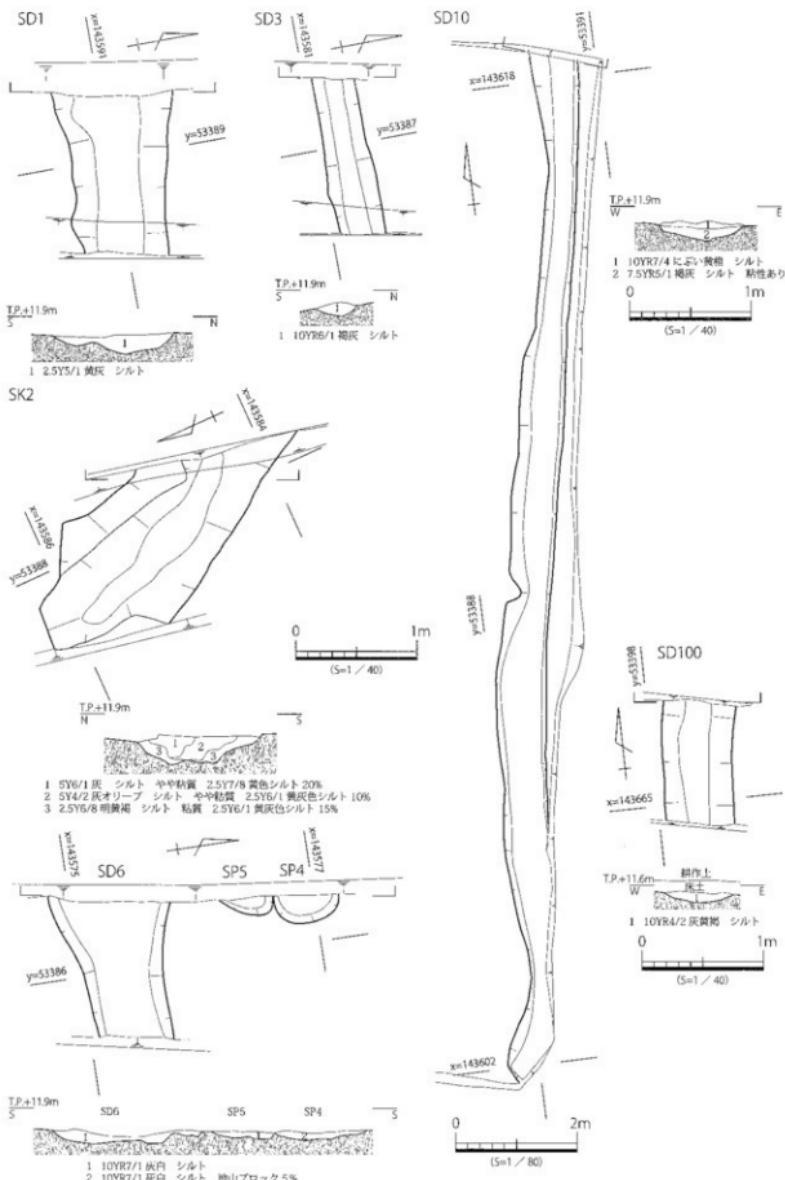
幅約0.45m、深さ約0.05mを測る。断面形は浅い皿状である。SD40との標高差はほとんどない。埋土は単層で、黒褐色極細砂～シルトである。

遺物は出土していない。

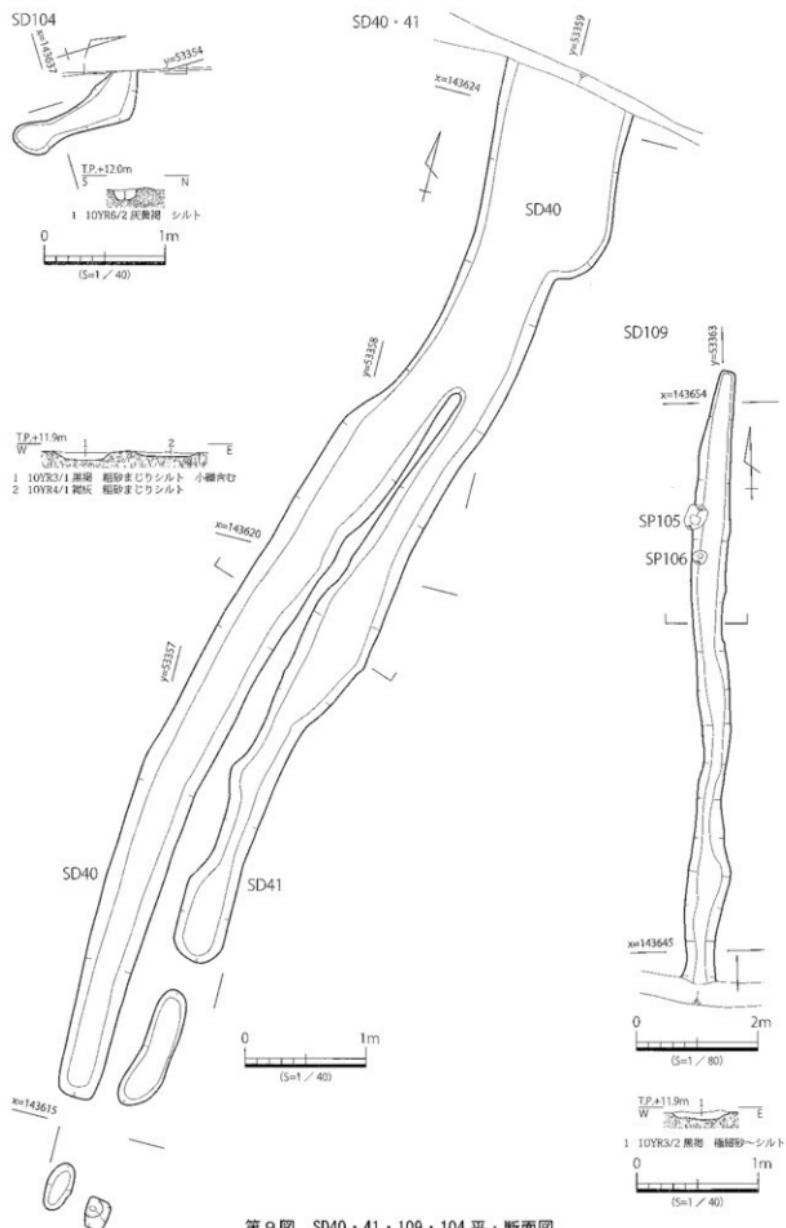
SD104 (第9回)

第6調査区の南側を南北から西に屈曲し調査区外へと延びる。主軸方位はN-0°-WからN-70°-Wである。

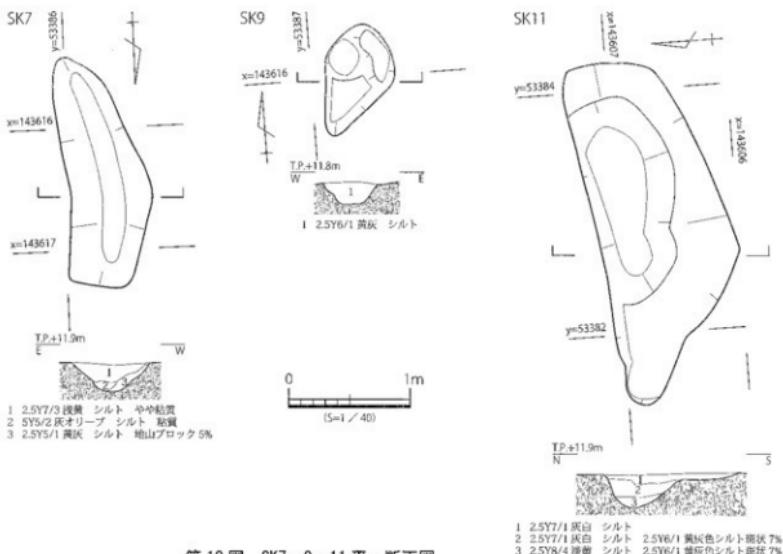
幅約0.2m、深さ約0.1mを測る。断面形はU字形である。埋土は単層で、灰黄褐色シルトである。



第8図 SD1・SK2・SD3・SP4・5・SD6・10・100平・断面図



第9図 SD40・41・109・104 平・断面図



第10図 SK7・9・11平・断面図

遺物は出土していない。

SK7 (第10図)

第2調査区の北側で検出した土坑で、平面形状はやや三日月形を呈する。主軸方位はN-10°-Wである。

最大長約1.9m、最大幅約0.6m、深さ約0.2mを測る。断面形はV字形である。埋土は3層に分層でき、上層が浅黄色シルトでやや粘質があり、2層がオリーブ色シルトで粘質がある。3層が地山ブロック土を含む黄灰色シルトである。

遺物は出土していない。

SK9 (第10図)

第2調査区の北側で検出した土坑で、平面形状は水滴形を呈する。主軸方位はN-25°-Eである。

最大長約0.95m、最大幅約0.6m、深さ約0.2mを測る。断面形は逆台形である。埋土は単層で、黄灰色シルトである。

遺物は出土していない。

SK11 (第10図)

第2調査区の南側で検出した土坑で、平面形状は不整長方形を呈する。主軸方位はN-75°-Eである。

最大長約2.8m、最大幅約1.1m、深さ約0.25mを測る。断面形は椀状で南側は浅くなる。埋土は3層に分層でき、上層が灰白色シルト、中層が灰白色シル

トに黄灰色シルトを斑状に含む。下層が淡黄色シルトに黄灰色シルトを斑状に含む。

遺物は出土していない。

SK21 (第11図)

第3調査区の南寄りで検出した土坑で、平面形状は棒状を呈する。主軸方位はN-85°-Wである。

最大長約5.3m、最大幅約1.0m、深さ約0.05mを測る。断面形は浅い皿状である。埋土は単層で、褐灰色細砂まじりシルトである。

遺物は出土していない。

SK22 (第11図)

第3調査区の南側で検出した土坑で、平面形状は棒状を呈する。主軸方位はN-70°-Wである。

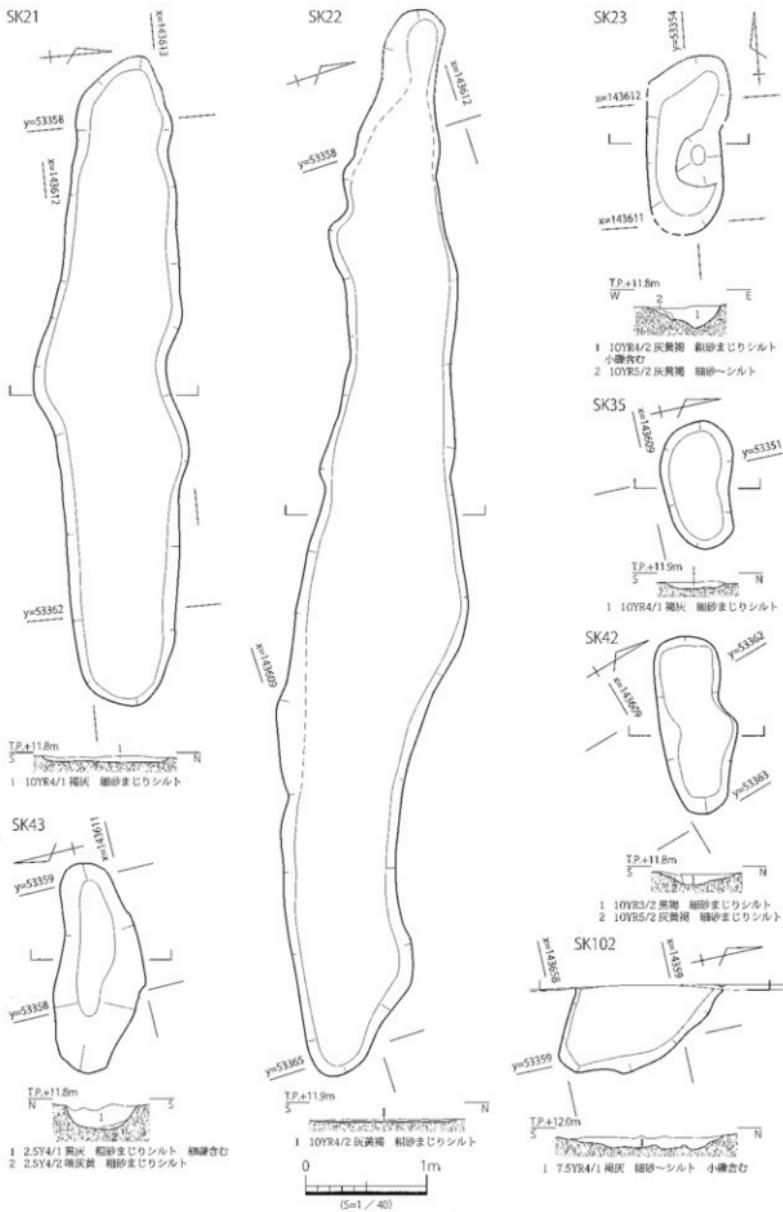
最大長約8.8m、最大幅約1.4m、深さ約0.02mを測る。断面形は浅い皿状である。埋土は単層で、灰黄褐色粗砂まじりシルトである。

遺物は出土していない。

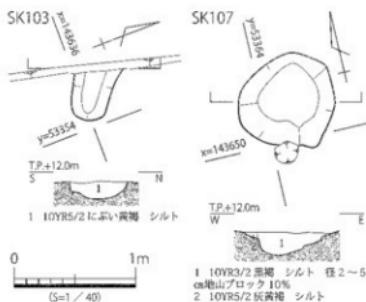
SK23 (第11図)

第3調査区の南西側で検出した土坑でSD24を切る。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位はN-25°-Eである。

最大長約1.5m、最大幅約0.6m、深さ約0.2mを測る。断面形は不整形である。埋土は2層に分層でき、



第11図 SK21・22・23・35・42・43・102 平・断面図



第 12 図 SK103・107 平・断面図

1 層が灰黄褐色粗砂まじりシルトに小礫含む。2 層が灰黄褐色細砂～シルトである。

遺物は出土していない。

SK35 (第 11 図)

第 3 調査区の南西隅で検出した土坑で、平面形状は梢円形を呈する。主軸方位は N-80°-W である。

最大長約 1.05m、最大幅約 0.5m、深さ約 0.05m を測る。断面形は浅い皿状である。埋土は単層で、褐色細砂まじりシルトである。

遺物は出土していない。

SK42 (第 11 図)

第 3 調査区の南側で SK22 の掘削後に検出した土坑で、平面形状は不整長方形を呈する。主軸方位は N-65°-W である。

最大長約 1.5m、最大幅約 0.6m、深さ約 0.1m を測る。断面形は浅い皿状である。埋土は 2 層に分層でき、1 層が黒褐色細砂まじりシルト、2 層が灰黄褐色細砂まじりシルトである。

遺物は出土していない。

SK43 (第 11 図)

第 3 調査区の南側で SK22 の掘削後に検出した土坑で、平面形状は梢円形を呈する。主軸方位は N-75°-W である。

最大長約 1.7m、最大幅約 0.7m、深さ約 0.2m を測る。断面形は椀状である。埋土は 2 層に分層でき、1 層が黄灰色粗砂まじりシルトに細礫含む。2 層が暗灰黄色粗砂まじりシルトである。

遺物は出土していない。

SK102 (第 11 図)

第 6 調査区の北側で検出した土坑で調査区外に延びる。平面形状は梢円形を呈する。主軸方位は N-60°

-W である。

最大長約 1.0m、最大幅約 0.7m 以上、深さ約 0.1m を測る。断面形は不整形である。埋土は単層で、褐灰色細砂～シルトに小礫含む。

遺物は出土していない。

SK103 (第 12 図)

第 6 調査区の南側で検出した土坑で調査区外に延びる。平面形状は長方形を呈する。主軸方位は N-55°-W である。

最大長約 0.45m、最大幅約 0.4m 以上、深さ約 0.15m を測る。断面形は椀状である。埋土は単層でぶい黄褐色シルトである。

遺物は出土していない。

SK107 (第 12 図)

第 7 調査区の東側で検出した土坑で、平面形状は円形を呈する。

最大長約 0.8m、深さ約 0.2m を測る。断面形は逆台形に縁辺は浅くなる。埋土は 2 層に分層でき、1 層が黒褐色シルトに径 2~5cm 地山ブロック土を含む。2 層が灰黄褐色シルトである。

遺物は出土していない。

ピット列群 (第 13・14 図)

第 3 調査区でほぼ一定間隔で連続するピット群を、東西方向に 3 列、南北方向に 4 列検出した。溝の残滓か農作業の痕跡か不明である。

A 列群と B 列群は西に約 2.5m 離れて同一方向に連続し、B 列群と C 列群は約 2.5m 離れてほぼ平行する。さらに西に約 2.5m 離れて SK22 の掘削後からも同様なピット 2 基を検出した。

D 列群と E 列群、F 列群は方向を変えながらも連続するとと思われる。F 列群と G 列群は約 1m 離れてほぼ平行し、D 列群と G 列群は約 2m 離れる。

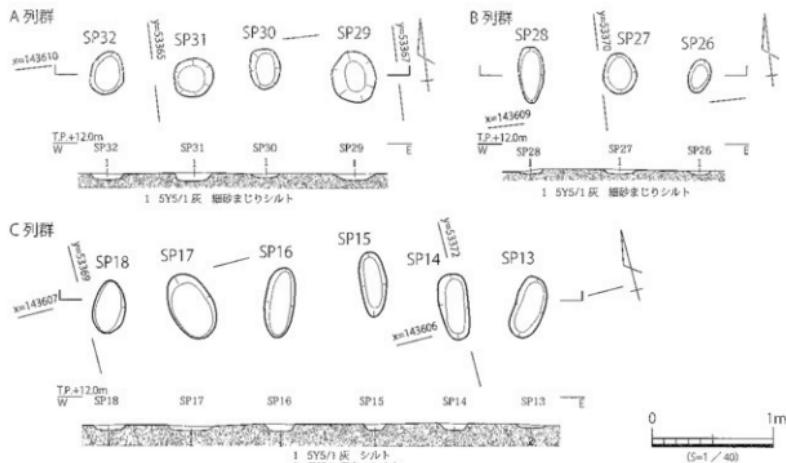
A 列群は第 3 調査区の南側を東西に連続して検出した。芯芯間距離は約 0.7m を測る。主軸方位は N-80°-W である。

ピットの規模は長さ約 0.6~0.45m、幅約 0.35~0.2m、深さ約 0.06~0.02m を測る。断面形は浅い皿状である。埋土は単層で、灰色細砂まじりシルトである。

遺物は出土していない。

B 列群は第 3 調査区の南東を東西に連続して検出した。芯芯間距離は約 0.7m を測る。主軸方位は N-80°-W である。

ピットの規模は長さ約 0.45~0.3m、幅約 0.3~0.2



第13図 ピット列群平・断面図(1)

m、深さ約0.04～0.03mを測る。断面形は浅い皿状である。埋土は単層で灰色細砂まじりシルトである。遺物は出土していない。

C列群は第3調査区の南東を東西に連続して検出した。芯芯間距離は約0.7mを測る。主軸方位はN-75°-Wである。

ピットの規模は長さ約0.6～0.4m、幅約0.35～0.2m、深さ約0.06～0.03mを測る。断面形は浅い皿状である。埋土は灰色シルトである。

遺物は出土していない。

D列群は第3調査区の西寄りを南北に連続して検出した。芯芯間距離は約0.75～0.7mを測る。主軸方位はN-10°-Eである。

ピットの規模は長さ約0.7～0.25m、幅約0.5～0.15m、深さ約0.1～0.02mを測る。断面形は浅い皿状である。埋土は灰色細砂まじりシルトである。

遺物は出土していない。

E列群は第3調査区の西寄りを南北に連続して検出した。芯芯間距離は約0.7～0.65mを測る。主軸方位はN-5°-Eである。

ピットの規模は長さ約0.5～0.3m、幅約0.4～0.3m、深さ約0.08～0.04mを測る。断面形は浅い皿状である。埋土は灰色細砂まじりシルトである。

遺物は出土していない。

F列群は第3調査区の西寄りを南北に連続して検出

した。SP50はSK21の掘削後に検出した。芯芯間距離は約0.7～0.3mを測る。主軸方位はN-15°-Eである。

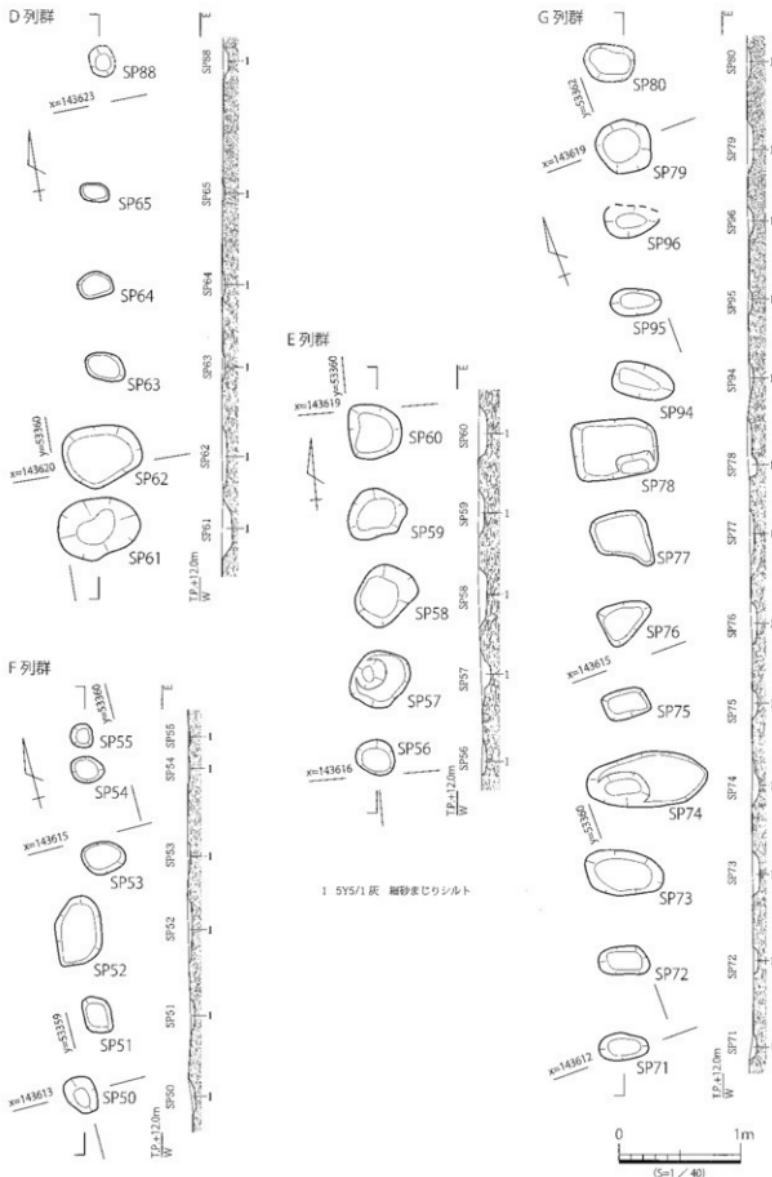
ピットの規模は長さ約0.6～0.2m、幅約0.4～0.2m、深さ約0.04～0.02mを測る。断面形は浅い皿状である。埋土は灰色細砂まじりシルトである。

遺物は出土していない。

G列群は第3調査区の西寄りを南北に連続して検出した。SP71・72はSK21の掘削後にSP94～SP96はSX90の掘削後に検出した。芯芯間距離は約0.7～0.6mを測る。主軸方位はN-20°-Eである。

ピットの規模は長さ約1.0～0.4m、幅約0.5～0.2m、深さ約0.07～0.03mを測る。断面形は浅い皿状である。埋土は灰色細砂まじりシルトである。

遺物は出土していない。



第14図 ピット列群平・断面図（2）

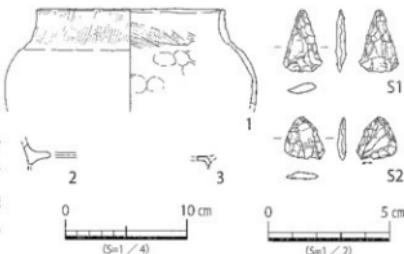
第4章 まとめ

第1節 遺跡と遺構

調査地は、南西から北東へとゆるやかに傾斜する地形に立地し、遺構面も現在の地形と同様に概ね南西側が高く、北東側が低い地形を呈する。床土直下で遺構が検出されたことから、耕作等によって遺構が削られた可能性がある。遺構の埋土は、灰白色のものと、黒灰色のものと認められ、灰白色のものが中世、黒灰色のものが弥生時代～中世までの遺構と考えられるが、遺物の出土量が少量であるため、詳細な時期決定はできない。当調査地は空港跡地遺跡の東端に隣接し、確認した遺構の時期も空港跡地遺跡東端部と同様の様相をしている。

確認した遺構の、現在の条里に沿う SD1・3・6・10・100・40・41・109・108 とピット列群は、条里施行後の農耕関連遺構と考えられる。対して SD24 は条里に沿わないことから条里施行前の遺構と考えられる。

以上の遺構の状況からも、当該地が集落域ではなく、生産域であったことを示すものである。



第15図 出土遺物

第2節 遺物について

今回の調査で出土した遺物は、コンテナ整理箱約1箱分と非常に少ない。中世と推定される茶釜、土師器片、石鐵、試掘調査で出土した須恵器片などである。

【参考文献】

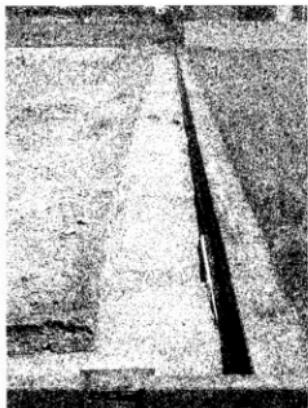
香川県教育委員会 財團法人香川県埋蔵文化財調査センター 香川県土地開発公社 1998『空港跡地遺跡III』

第1表 土器観察表

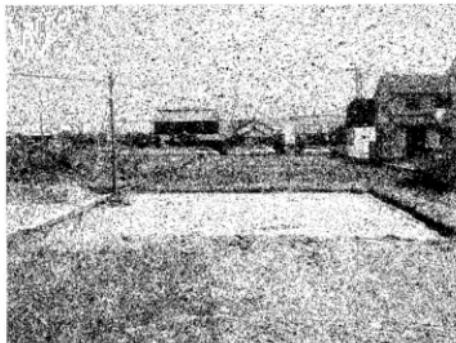
報文 番号	遺構・層位名	種類	器種	(部位)	法量(cm)		調整		色調		胎土	焼成	残存 率	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面				
1	SD108(縄構)	瓦質土器	茶釜		(15.6)	—	[7.9]	打、 目 後打 後打	N4/0 灰 褐色	10Y6/1 灰 色	0.1～3mm程度 の石英・長石・ 赤色鉱物含む	良	反転 後元	内面頂部・ 体部；接合部
2	SD108(縄構)	瓦質土器	茶釜		—	—	[1.8]	横方 向打 打	N6/0 灰 色	10Y6/1 灰 色	0.1～3mm程度 の石英・長石・ 赤色鉱物含む	良	断片	外面下部； 接合部
3	灰白色包含層	土師質土器	杯？	高台部	—	—	[0.9]	打 マガ	10YR8/6 黄 褐色	10YR8/6 黄 褐色	0.1～1mm程度 の長石・白色鉱 物含む	良	断片	

第2表 石器観察表

報文 番号	遺構・層位名	種類	器種	法量(cm)			石材	重量(g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
S1	SX90	打製石器	石鏟(平基式)	2.5	1.6	0.45	サヌカイト	1.2	風化著しい、白色風化
S2	SX25	打製石器	石鏟(平基式)	1.8	1.65	3.5	サヌカイト	0.8	



第1調査区全景（南から）



第2調査区全景（南から）



第3調査区全景（北西から）



第4調査区東側（西から）



第3調査区全景（南東から）



第5調査区（北から）

図版2



第6調査区（北から）



第7調査区（北東から）



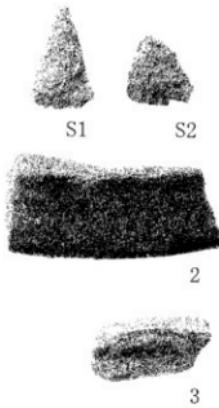
SK11（西から）



SX90（北から）



1



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ろくじょうかみあおきいせき						
書名	六条上青木遺跡						
副書名	保育園新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第 174 集						
編著者名	船塚 紀子、磯崎 福子						
編集機関	高松市教育委員会						
所在地	〒 760-8571 香川県高松市番町一丁目 8 番 15 号 TEL.087(839)2660						
発行年月日	平成 28 年 9 月 30 日						
ふりがな		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				調査原因
ろくじょうかみあおきいせき 六条上青木 遺跡	高松市 六条町	37201		34° 17'36"	134° 04'47"	H28.1.18 ~ 1.20 H28.5.12 ~ 5.20	約 585m ² 保育園新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項
ろくじょうかみあおきいせき 六条上青木 遺跡	生産域	弥生時代 古墳時代 中世 時代不明	落ち込み 溝 鍬溝 溝、土坑、ピット列群			弥生土器、石器、 土師器、須恵器、 瓦質土器	
概 要	空港跡地遺跡の縁辺部と考えられる。出土遺物が極めて少ないが、条里に沿う遺構は条里施行後の農耕関連遺構の可能性がある。						

高松市埋蔵文化財調査報告第 174 集

保育園新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

六条上青木遺跡

平成 28 年 9 月 30 日 発行

発 行 社会福祉法人 相愛福祉会

高松市六条町 604 番地 7

編 集 / 発 行 高松市教育委員会

高松市番町一丁目 8 番 15 号

印 刷 有限会社 中央ファイリング